

毎月1回、身近な問題に関する学生の議論を掲載しています。感想や意見をお寄せください。〒960-8602 福島民報社地域交流部。ファックスは024(531)4117、メールはchiki@fukushima-mir.jp、po.op.jp(氏名・電話番号を明記)

齊藤先生 ダイバーシティ（多様性）社会を皆さんはどのように捉えているだろうか。ハードやソフト、さまざまな側面から考えることができる。

金沢 一人一人が多様性を意識して行動することが、制度や環境面などのハードにつながる。例えば法制度だけ作ったとしても、正しく理解されていなければ「作っただけ」になってしまう。

鈴木 多様性を認めないような、差別や偏見を含んだ発言を公的な立場の人がするケースも見られる。

田畝 個々の考えを尊重する必要がある。しかし、差別や偏見で誰かを傷つけることになってはいけない。

厚美 ダイバーシティ社会の広がりにおいて、SNS（会員制交流サイト）の影響は大きい。得られる情報が増えたことで理解が広がる一方、受け入れることができず置いていかれる人もいる。職場の管理職などにそのような人がいる場合、就労面に影響が出る。

若松 ダイバーシティ社会だから何でも許容しなければならないということではない。否定的な意見があってもいい。しかし、それが他者の生活に影響

を与えるものになってはいけない。

金沢 左利きの人が習字は右手で書くように指導されたという話を聞く。左利きという個性を曲げてまでやる必要があるのか。学校教育の時点で個性や多様性を抑圧しているとも受け取れかねないことが行われている。

鈴木 知らず知らずに刷り込まれている部分があるかもしれない。その影

響は大きい。

齊藤先生 多様性が認められる社会の中では、ナラティブ(物語・語り)・アプローチというものが重要になる。

金沢 多様性は「多」という文字がつくように、違いが無数にあることを示している。ベースには物語がある。多様性を知るということは、その人の物語を知ること。そして違いを認める

ということ。属性だけで「違う」とすることは、認めないことにつながる。

厚美 多様性にはさまざまな例がある。自分が経験していないものを知り、自分の価値観と異なるものを排除せず、多くの人の考えやその根拠を聞くことから始める必要がある。

桜井 自分以外を知るというのは当然必要なことだね。

遠藤 語りの中には手掛かりがたくさん含まれている。

渡部 このテーマは、個々の考えや人生の物語があるから難しい。「最近の若い者は」という言葉のように、世代に共通する物語がベースにあり、それが共通の価値観につながることもある。だからこそナラティブ・アプローチが重要になる。

齊藤先生 皆さんが話してくれた通り、ナラティブ・アプローチは、その人を知る＝受容することから始まる。受容される経験は、ダイバーシティ社会から排除される状況にある人にとって自己効力感を高めることにつながる。いかに自分の価値観に左右されず、相手の物語に寄り添えるかが問われてくる。一次回は3月第4週に掲載予定

ダイバーシティ

人の物語に寄り添う

福祉学部福祉心理学科
写真左から遠藤美空さん、渡部隆太さん、齊藤隆之准教授、田畝佳也乃さん、桜井奈緒香さん(手前中央)、厚美華奈さん、若松あゆみさん、鈴木茜さん、金沢弥和さん(学生はいずれも3年)

